

2025 年度私立大学図書館協会海外派遣研修

イリノイ大学図書館モートンソンセンターアソシエイツ・プログラム

および米国図書館協会（ALA）年次会議・展示会参加報告書

2025 年 9 月 30 日

立正大学学術情報部

島田貴司

本報告書の構成

1. はじめに

2. 研修参加動機と目的

3. プログラム概要

4. 研修内容

(1) 1週目

①GREAT

②DiSC

③Strategic Foresight

④OCLC (Online Computer Library Center)

(2) 2週目

①User-Centered Design

②Oak Street Facility / Conservation Lab

③Libraries for Sustainable Development

④YOUmedia

(3) 3週目

①Urbana Free Library and Champaign Public Library

②Tour to Springfield

③Tour to Arthur

④Lunch with a Library Buddy

(4) 4週目

①CU Community Fab Lab

②SILL(Strengthening Innovative Library Leaders) Leadership Training

③Libraries & Web Accessibility

④Grainger Engineering Library Information Center and IDEA LAB Tour

(5) 最終課題と修了式

5. ALA 会議

6. おわりに

参考文献等

1. はじめに

私は、幸いなことに、2025 年 6 月 1 日～6 月 30 日まで、私立大学図書館協会国際図書館協力委員会のサポートを受けて、イリノイ大学図書館モートンソンセンターアソシエイツプログラム（以下、本プログラム）（本プログラムの期間は 6 月 2 日～6 月 25 日）¹⁾と米国図書館協会(ALA: American Library Association)年次会議・展示会（以下、ALA 会議）（参加期間は 6 月 26 日～6 月 30 日）²⁾に参加する機会を得た。

本プログラムの日本からの参加者は 2003 年より始まり、私で 15 人目になったようである。これまで本プログラムに参加した先輩諸氏の報告書はとても充実した素晴らしい内容であり、一読に値するものばかりである³⁾。本プログラムで実施された個別の内容は毎年実施されているものもある。そのため、本稿では、私の参加の動機や目的、本プログラムと ALA 会議の概要と、個人的な学びや気づきを中心に、これまでの報告書となるべく重複しないように記載させていただく。

2. 参加動機・目的

私は 2011 年に私立大学図書館協会国際図書館協力委員会のサポートのもと、海外集合研修に参加することができた。この時の研修先は米国北西部で、1 週間の滞在期間に 8 つの大学と 11 の大学図書館を訪問した。この時は、全米で普及していたラーニングコモンズを中心に視察することができた⁴⁾⁵⁾。この際に、次はもう少し長く、米国の事例を知りたいという希望が芽生えた。これが、最初のきっかけだったと感じている。その後、この海外集合研修で得られた知見を、自身の職場におけるラーニングコモンズの設置や学修環境の整備などに活かすことができた。また、この経験が起点となり、私立大学図書館協会東地区部会研究分科会（企画広報研究分科会）での活動や大学院での研究（図書館情報学）、私立大学図書館協会での幹事校（東地区部会研究担当理事校）等を通して新たな知識や経験に加えて他大学図書館の方々との知己を得ることができた。

私の大学院における研究テーマが多様化するメディア、特に映像について、その編集技術を活用した大学図書館における影響や活用といったものだったこともあり、研究テーマの周延的な理解の一環として、2010 年代の中ごろから後半にかけて米国におけるメイカースペースやデータビジュアルライゼーションラボ、マルチメディアコモンズのようなラーニングコモンズに続くと思われる施設が米国の大学で多く設置されてきている現状を文献から知ることができた。そのような事例や知見を元に、職場の施設にも、メイカースペースやデータビジュアルライゼーションラボのような要素を持ったエリアを設置し、運用を始めたが、本場である米国ではどのような運営や維持がなされているのかについては直接、この目で見ることはできないままであった。現在設置している職場の施設の改善を行う前に是非とも一度、この目で米国の状況を見たいというのが常に頭の片隅にあった。

長いコロナ禍を経て、移動が自由となり、自身の職場の施設の改善もいよいよという段になった。粘り強い学内調整を経て、ようやく本プログラムに参加することができた。本プログラムに参加することが決まってから、改めて米国の現状を調査している過程で、帝京大学の土岡真紀子先生にお会いし、米国の図書館における e スポーツに関するお話を伺うことができた⁶⁾。

上記のような経緯を経て、本プログラムに参加する目的は以下のような形に定めることとした。

- (1) メイカースペースにおける機器の利活用について利用者に指導する方法を理解する。
- (2) ビデオの撮影と編集のための機器の利活用について利用者に指導する方法を理解する。
- (3) 図書館におけるゲームの保存と利用の現状を理解する。

3. プログラムの概要

今年実施された本プログラムは、「図書館の自由：オープンで包括的、そして関与的」というテーマだった。テーマは毎年、更新されるが、研修の内容については大きく変更がないようである。本プログラムは、図書館情報学領域に関する多角的な講義、チームビルディングおよびリーダーシップ育成を目的としたワークショップ、図書館等関連施設の視察、ならびに文化交流イベントから構成されている。本プログラムの参加者が確実に行うことは、以下の通りである。

○プログラム開始前

- ・リモート打合せ（4月頃）

参加者がリモートで集まり、プログラムスタッフから本プログラムの概要説明やプログラム中の生活で必要になることなどを聞くことができる。

○プログラム中

- ・本プログラムの冒頭で実施する3分間の自己紹介のプレゼンテーション
- ・最低週1回のブログ更新（最初のブログで自身の本プログラムにおける目標の宣言をする）⁷⁾
- ・本プログラム最終日に実施する3分間のプレゼンテーション（いくつかのケース・テーマが提示され、それに沿った内容を検討する）
- ・帰国後に個人でどのような計画で本プログラム中に得た知見や経験を活かして業務で実現できるのかの計画（アクションプラン、後述）の策定

○プログラム終了後

- ・リモート打合せ（12月～翌1月頃）

この報告書執筆時点ではこの打合せに参加していないため詳細の内容は不明だが、プログラム中に作成したアクションプランなどの進捗状況などを確認するものと思われる。

当然のことながら、本プログラムを通して積極的・主体的に参加者との交流や講義やワークショップ内での発信が求められる。

約3週間半の期間の中で行われる様々な取り組みの中で自身の立てた目標に沿った理解を深めていく。自分の立てた目標に関連した講義やワークショップや見学では、担当者に直接、踏み込んだ意見を聞くこともできるし、質問をすることができる。また、連絡先を聞き、継続的にコミュニケーションを取れるのは本プログラムの非常に優れた特徴となっている。更に事前に自身の研究テーマなどがある場合は、その内容を本プログラムの担当者に伝えることで、イリノイ大学内の関連施設に連絡を取って見学やインタビューの機会を設けてくれることもある。今年のプログラムでは、参加者の多くが障害学生サービスに関する興味を持っており、障害者サービスと教育サービスの施設（イリノイ大学応用健康科学部）を見学する機会を得ることができた⁸⁾。また私の個人的な目標もあり、予定されたプログラムにはなかったイリノイ大学コミュニティファブ

ラボの見学を本プログラムの参加者と共に見学をすることができた⁹⁾。

本プログラムの今年の参加者(アソシエイツ)は14か国から参加した16名で構成されていた。当然のことながら経歴もバックグラウンドも違うこの16名がほぼ毎日、顔を合わせて、それぞれの経験をもとにお互いをサポートし少しずつお互いの理解を深めながら図書館に関する課題や問題について語り合っていく。これは個人的にはとても素晴らしい経験だった。

参加者の在住国

(1)チリ、(2)ガーナ、(3)フィリピン、(4)韓国(2名参加)、(5)スペイン、(6)バルバドス、(7)トリニダード・トバゴ(2名参加)、(8)マレーシア、(9)カタール、(10)日本、(11)コスタリカ、(12)ベトナム、(13)南アフリカ、(14)インドネシア

本プログラムは、イリノイ大学図書館のモートンソン国際図書館プログラムセンターが毎年実施しているプログラムで、プログラムを通してグローバルに図書館と図書館員との連携を深めること、図書館員の専門性を高めること、リーダーシップの育成といったことを行っている。今年は、以下の担当者がプログラムを企画し、遂行してくれた。彼女らのプログラム遂行に関する献身的な努力には感謝しかない。

プログラムスタッフ

Clala M. Chu, Peggy Nzomo, Voyo Jamieson, Emili Sherill

アンバサダー

Barbara J. Ford, Amani Ayad

アンバサダーの2名が本プログラムを立ち上げた方々と伺った。また、Barbaraさんは、ALA (American Library Association) のトップだったこともあり、全米の図書館界ではとてもよく知られた人である。

4. 研修内容

ここでは、私が発信したブログ(毎週、1週間に行った様々な取り組みの中で特に印象に残ったものをまとめた)の内容を中心に記載をしていく。

(1) 1週目

①GREAT

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の図書館は、利用者向けのガイドラインを策定している¹⁰⁾。「GREAT 利用者サービスガイドライン」と呼ばれるこのガイドラインは、図書館の利用者に対する姿勢の頭文字を取って表している。

G: Greet all customers and make them feel welcomed

すべての利用者に挨拶し、歓迎の気持ちを伝える。

R: Respect cultural and other personal differences

文化やその他の個人的差異を尊重する。

E : Evaluate and clarify customer's expectations

利用者の期待を評価し、明確にする。

A : Address and respond to customer's needs

利用者のニーズに耳を傾け、対応する。

T : Thank and verify that needs have been met

感謝の意を表し、ニーズが満たされたことを確認する。

このガイドラインは、図書館において利用者と接する際に必要な姿勢であり、このガイドラインに基づいたサービスが提供されていることに感銘を受けた。自身の職場でもこのようなガイドラインを設定し、サービスが提供できるように検討できればと強く感じるものであった。

②DiSC

日本では「DISC 性格診断」というような名称で職業の選択などの際にサポートするツールとして活用されている。DiSC は、人の特性を 12 のパターンに分類している。そして、それぞれの特性に応じた対応方法をワークショップにおいて学んだ。ワークショップを通して改めて自分自身を知り、異なるタイプの人とうまく付き合う方法を学ぶ良い機会となった。私はこのような性格のタイプ別にコミュニケーションスタイルを変更していくことが組織における業務遂行上必要だと感じていたこともあり、自身が所属している組織内では「社会性タイプ」をはじめとした様々な診断の共有やワークショップを行っていた。今回のワークショップを受講し、改めて海外の業務を円滑に遂行していく上でもこのようにタイプを診断し、理解したうえでコミュニケーションを取っていくことが重要であることを知ることができ、非常に有意義だった。

③Strategic Foresight

日々、様々な情報が発信され、イノベーションのスピードもとても速い現在において、図書館の未来戦略を考えていくには、多様な観点からの情報を参考にする必要がある。この講義では、講師から多様な観点を提示してもらうことで多くの示唆を得ることができた。以下は、講師の Lisa Janicke Hinchliffe 氏が講義の中で紹介された PESTLE トрендについて共有する。

PESTLE とは、政治 (Political)、経済 (Economic)、社会 (Social)、技術 (Technological)、法 (Legal)、環境 (Environmental) の頭文字をとったものである。図書館戦略を策定する際には、これらをそれぞれ考慮する必要がある。図書館で働く人々は、良くも悪くも近視眼的になりがちだと私は個人的に感じている。そのため、図書館戦略を考える際には、常にこれらの考え方を念頭に置く必要があるということを痛感した。

これに加えて、彼女は以下の参考情報も共有してくれた。これらはこれから図書館の経営を戦略的に検討していく際の情報源や考え方のツールとして役立つものである。

- ・ IFLA トレンドレポート 2024¹¹⁾
- ・ 2025 EDUCAUE ホライズンレポート¹²⁾
- ・ Futures Wheel¹³⁾

④OCLC (Online Computer Library Center)

世界最大の書誌データベースの World Cat を運営する機関の本部を見学する機会に恵まれた。今まで OCLC の存在及び活動について大雑把にしか知らなかったのは、私が日々行っている業務からは遥か遠くで行われている物事であるかのような感覚しか持ち合わせていなかったためである。現場を訪れ、初めて OCLC にて組織の歴史、成長、進化を知ることができた。丁寧な説明と共に OCLC の発展を知ることができた。また、OCLC が発表した「New Model Library」についても紹介していただいた¹⁴⁾。これは、コロナ禍を契機に図書館が得た様々な経験を踏まえてこれからの図書館モデルについて世界中の図書館におけるリーダーたちと議論したものをまとめたものとなっている。私は、OCLC が書誌データベースのみならず、このような世界の図書館の在り方について取りまとめていくような取り組みを行っていることを恥ずかしながら、これまで認知できていなかった。今回、OCLC の幅広い活動について知ることができて大変勉強になった。

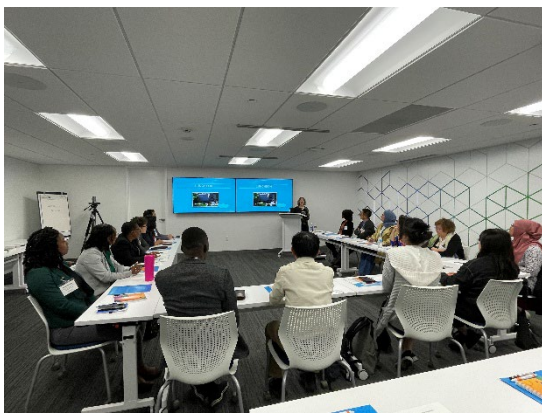


図 1：OCLC でのレクチャー



図 2：OCLC の施設見学

(2) 2週目

①User-Centered Design

シーベル・センター・フォー・デザイン (SCD: Siebel Center for Design)¹⁵⁾において、ペルソナを活用した、利用者の動向を理解するワークショップを経験した。SCD は人間中心設計(HCD)を推進しており、その考え方はデザイン思考に基づいている。ペルソナとは、マーケティングなどの分野で活用されており、架空の人物(典型的な利用者)を設定したうえで、サービス等を考

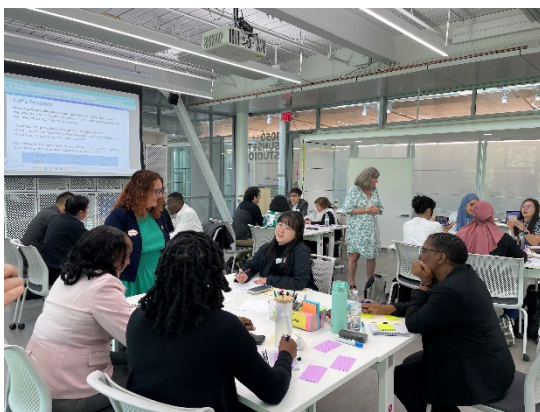


図 3：SDC 内のワークショップ



図 4：SDC にあるメイカースペース

える手法に活用されるものである。今回のワークショップでは、短時間ながら、参加者がペルソナを作成し、情報探索行動やその過程での感情の変化について検討した。このような情報を活かして、利用者サービスなどに活用するものであるが、日本の図書館分野では、こうした人間中心設計に基づくサービスの事例は多くない。本学図書館では、かつて、試験的にペルソナの検討を試みたことがあるが、業務スケジュールの都合もあり、実践に至っていない。今回、改めて学ぶことができたので、どこかのタイミングで業務に活用できればと思った。

②Oak Street Facility / Conservation Lab

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の資料保存のための施設や取り組みを見学することができた¹⁶⁾。図書館資料は巨大な倉庫とも言える書庫に保管されており、書庫はこれまで見たことのないほど高く、その規模は日本のものとは大きく異なっていた。室内の温度は 10℃、湿度は 30% に保たれており、日本の基準と比較して非常に低い数値だった。また、別の日に訪れたシカゴ大学図書館の書庫もこの温湿度に近い数値に保たれており、アメリカの図書館としては平均的な水準のようであった。

資料の保存修復フロアも見学することができた。資料の修復及びデジタル化のための機材が充実しており、様々な専門性を持ったスタッフが作業に携わっていた。イリノイ大学図書館のような大規模施設ならではの充実した環境だった。

③Libraries for Sustainable Development

日本でも社会全体で積極的に取り組んでいる SDGs に関して、図書館における取り組みについて考える時間を持つことができた。SDGs については、これまでも図書館内で何ができるかといったことを検討してきているが、グローバルな視点で考えたことがなかった。本プログラムの世界から集まった参加者と共に各国の状況を共有しつつ図書館の取り組みについて考えることはとても新鮮だった。SDGs の 17 の目標それぞれに対して図書館は何ができるかを考えるセッションは、図書館が情報を通して人々に様々な影響を与えることができる機関であることを改めて認識することができる良い機会となった。

④YOUmedia

YOUmedia シカゴ公共図書館が提供する、10 代の若者向けの様々なアクティビティのためのス



図 5：YOUmedia 見学

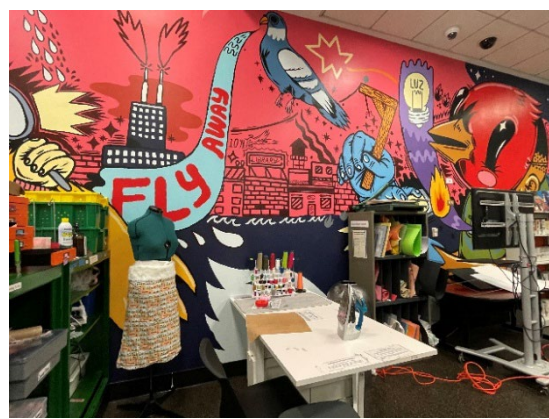


図 6：YOUmedia 内の縫製スペース

ペースである¹⁷⁾。シカゴ公共図書館の説明は「シカゴ公共図書館 29 館に設置された、革新的な 21 世紀のティーン向けデジタル学習スペースです」となっている。レーザーカッターや 3D プリンター、ミシンといったものづくりから、音楽活動やゲームまで、幅広いアクティビティを提供する施設となっている。シカゴ公共図書館のウェブサイトには、10 代の若者が YOUmedia を活用している動画や、各種イベント情報が掲載されている。

また、この YOUmedia を案内してくれた担当者より、この施設を高校時代に活用して世界的アーティストとなったチャンス・ザ・ラッパーや、映画監督の事例を聞くことができた。このような事例は、図書館の将来性を感じさせるものであった。図書館は情報を提供する場であるだけでなく、様々なメディアを生み出す拠点であるという生きた事例を知ることができた。

施設を案内してくれた担当者に、なぜこのような施設が図書館にあるのか、とひと昔前の日本人の図書館職員にありがちな質問をしてみた。彼は、YOUmedia に設定されているゲームなどの設備は娯楽のためのものだけではなく、本や情報へのアクセスの入り口として、また 10 代の若者が YOUmedia で働く大人と繋がって新しい情報を得ることもできる場所であるという点を意義として強調していた。対面でのコミュニケーションを通して、司書は 10 代の若者のニーズを知り、新たな興味関心を提供できることになると言っていた。これこそが、図書館における新たな情報提供の手段・手法であり、彼らが高いハードルを感じることなく彼らの興味関心のままに図書館に足を向けられる素晴らしい環境だと感じた。個人的には、この意見こそまさに聞きたかったことであり、これからの図書館の方向性の一つだと強く実感することができた。

(3) 3 週目

① Urbana Free Library and Champaign Public Library

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校は、アーバナ市とシャンペーン市にまたがって位置しており、キャンパス名は両市の名前が付けられている。公共図書館はどちらの市にもあり、私たちは両方の図書館を訪問することができた。

まずはアーバナ市の公共図書館を訪問した¹⁸⁾。この図書館の興味深い活動の一つは、「SEED EXCHANGE」という、来館者に野菜や花の種を配布する取り組みである。来館者自身が収穫した種の寄付も受け付けており、大変好評だという説明を受けた。また、メイカースペースはとても広く、レーザーカッター、3D プリンター、ゲームスペース、音楽が演奏できるエリアなどが揃っ

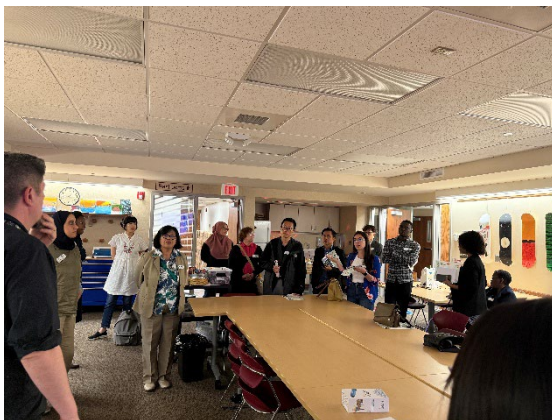


図 7：メイカースペース
(Urbana Free Library)

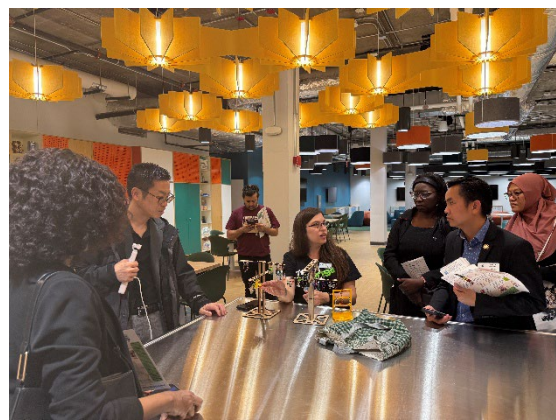


図 8：メイカースペース
(Champaign Public Library)

ていた。個人的に疑問に感じていたのは、これだけ多くの機器類が利用できる状態になっているが、そのスペースを担当している職員はたいてい数人であり、どのように使い方などについて指導しているのかということだった。案内してくれたスタッフによると、機器類の使用方法的説明は、スタッフが使用方法を知っている場合は、個別に対応してくれるということである。また、使用方法がわからない場合でもスタッフを交えた利用者同士がメイカースペース内の機器の使い方を教え合うようなスタイルなのであるということを紹介してくれた。

次にシャンペーン市の公共図書館を訪問した¹⁹⁾。天井から色鮮やかなオブジェが吊るされた明るいエントランスを抜けると、会議室があり、図書館員の方から図書館の説明を受けることができた。子どもから高齢者までの幅広い年代に対応したプログラムが用意されていることに圧倒された。この図書館には「ザ・スタジオ」と呼ばれるメイカースペースが1フロア全体を占めている。そこでは、3Dプリンターやレーザーカッター等を使ったものづくり、音楽鑑賞、ポッドキャスト、ゲームなど、様々な用途で利用できる環境が整っている。決して大きな都市ではない公共図書館に、これほど充実したメイカースペースがあることに驚いた。

②Tour to Springfield

イリノイ州の州都スプリングフィールドに日帰りツアーを行った。イリノイ州は、車のナンバープレートに「リンカーン州」というスローガンが掲げられていることからわかるように、第16代大統領であったリンカーンの功績を称える州である。

まず、リンカーン関連の資料を収蔵する図書館と、図書館の並んで建てられている博物館を見学した²⁰⁾。普段はなかなか見ることができない、とても貴重な資料を解説付きで紹介してもらえる機会を得ることができた。図書館と博物館はどちらも、リンカーンが活躍した当時の状況（南北戦争の詳細）やリンカーンの生涯と行った政策、そしてそれらの現在への影響など、多岐にわたる内容を学ぶことができる場所となっている。

次に、イリノイ州立図書館を見学させていただいた。街の公共図書館とは違い、規模や重厚さを感じるのには日本と似ていると思った。訪問中（イリノイ州立図書館の取り組みのプレゼンを受講している際）、竜巻警報が発令された。窓ガラスのある部屋から避難をしなければならないということで、約1時間地下に避難することとなったが、貴重な経験となった。

③Tour to Arthur

キリスト教の戒律を厳格に守るアーミッシュの人々が多く住む地区、アーサーへのツアーに参加した。アーミッシュと呼ばれる人たちの存在について、聞いたことはあったが、実際に詳しく知ることはなかった。今回の訪問では、実際にアーミッシュの人々の生活を間近に見て話を聞けるととても貴重な経験になった。

まず地元の公共図書館を訪問した²¹⁾。小さな町の小さな図書館だが、電気も通信手段もほとんど持たないアーミッシュの人々にとっては貴重な情報源となっているということだった。私たちが訪問した際もアーミッシュの人々が図書館を利用しており（服装に特徴があり、すぐに判別することができる）、彼らも情報社会から隔絶されている感はあるながらも、図書館が大切な情報源として認識していることを垣間見ることができた。

次に、アーミッシュの住宅を訪問させていただいた。とても綺麗に整っており、木材を中心とした家具に囲まれた大きな邸宅であるが、電化製品がほとんどない。まるで西部劇の映画のセットの中にいるような気分だった。母屋の隣に設置されている馬車のガレージの広さにも驚いた。アーミッシュの人々にとって馬車は基本的な移動手段であり、訪問した家には4台の馬車が保管されていた。

アメリカにはアーミッシュを含め、キリスト教を基盤としながらも多様な教義が存在しており、それぞれコミュニティがある。また、先住民として知られているアメリカンインディアンをはじめとして、アメリカ合衆国の成立過程で多様な民族の流入があることはご存じのとおりである。今回の訪問では、本プログラムの参加者との交流や、アメリカ合衆国における文化体験も含め、世界における生活環境や民族の多様性を改めて実感することができた。

④Lunch with a Library Buddy

本プログラムの参加者は、滞在中にイリノイ大学図書館内のスタッフからライブラリーバディと呼ばれる担当者がつくことになっている。彼らは彼らの経験をもとに参加者の疑問や課題に応じてくれる。私のライブラリーバディは、国際地域研究図書館の館長であるスティーブ・ウィット博士だった。彼はこれまでも本プログラムにおける日本からの参加者のライブラリーバディになっているため、以前の参加者の報告書でも度々、登場している。彼は私をランチに誘ってくれ、いろいろと話す機会を提供してくれた。日本に滞在した経験があり、年齢も立場も近いこともあり、図書館やアメリカと日本の文化の違い、お互いの趣味などについて語り合い、楽しい時間を過ごすことができた。

このランチの際に彼から教えていただいたことの一つに、近代日本の教育者であり思想家でもある新渡戸稲造の「国際心」という言葉である。私は、かつて日本の紙幣に新渡戸稲造が使われていたので、名前や簡単な略歴は知っていたが、「国際心」という彼が提唱した言葉は知らなかった。AIで「国際心」について調べてみたところ、「自国の文化への深い理解を基盤として、外国や外国の文化への単なる関心にとどまらず、積極的に他国や他文化と交流し、相互理解を深め、世界平和に貢献する精神」を指しているとのことだった。まさに私たちライブラリアンが取り組んでいることであり、モータンソンセンターの活動はまさにこの「国際心」を体現しているものだと感じた。

(4) 4週目

①CU Community Fab Lab

イリノイ大学内のファブラボを見学することができた⁹⁾。このファブラボは、夏休み期間中は日曜日のみのオープンということもあり、訪問させていただいた時には多くの人で賑わっていた。ものづくりに関わる様々な設備が整い、デジタルファブリケーションだけでなくアナログなものづくりにも対応していた。大学の施設でありながら、ファブラボとして地域にも開かれており、学内の他部署との連携も図られている。設備が非常に充実しており、一つ一つの設備を習得し、ものづくりができるようになるにはどれだけの時間と労力が必要なのか想像できないほどであった。ファブラボも図書館と同様に、創造と学びを媒体として、大学内だけでなく広く社会にも門



図 9：CU Community Fab Lab

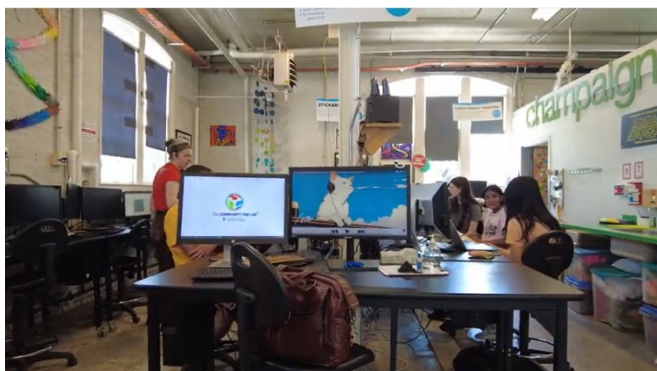


図 10：CU Community Fab Lab（内部）

戸を開き、他部署との連携も図っていると感じた。日本では大学内にファブラボが設置されている施設は多くないが、今回の訪問でその重要性と必要性を実感することができた。

②SILL(Strengthening Innovative Library Leaders) Leadership Training

モートンソンセンターで開発され、海外でも実施された実績のある図書館リーダーシップ・プログラムが SILL Leadership Training と呼ばれているものである²²⁾。このプログラムを短期間ではあるが体験することができた。

本プログラムに参加した 1 週目で体験した DiSK プログラムと同様に、参加メンバーのリーダーのタイプをプログラムの最初に分類し、それぞれのタイプに応じた対応方法をワークショップ形式で学ぶプログラムであった。これまで図書館のリーダー向けの研修プログラムではリーダーのタイプを分けて対応するといった経験をしたことがなかったので、新鮮な体験だった。このような取り組みが定期的かつ体系的に実施されれば、組織の運営も大きく変わっていくのではと期待できるものであった。



図 11：SILL ワークショップ



図 12：SILL 修了式

③Libraries & Web Accessibility

生活を行っていくうえで、様々な障害のある方々へのサービスに関して、特に図書館におけるデジタルアクセシビリティ確保の取り組みについてお話を聞くことができた。多くの日本の大学図書館では、こうした取り組みの必要性は認識しているものの、組織的に実施できていない現状があり、大変勉強になった。障害のあるなしに関わらず、デジタルデバイドの問題を考える上で、デジタルアクセシビリティの確保は極めて重要であり、図書館が担うべき重要な課題である。図

書館だけで取り組むことは不可能であり、関係者との連携が必要であることを具体的に学ぶことができた。

④Grainger Engineering Library Information Center and IDEA LAB Tour

工学図書館を見学し、図書館内のメイカースペース「IDEA LAB」を訪問させていただいた²³⁾。夏休み期間中にもかかわらず、図書館は多くの利用で賑わっていた。IDEA LAB は、レーザーカッターや3Dプリンターはもちろんのこと、VRやAR、巨大スクリーン、ゲームプログラムなども備えたデータビジュアライゼーションラボの要素を備えている。ここには現在の日本の大学図書館では考えられないがNintendo SwitchやSony PlayStation等のゲーム機も設置されており、利用者の憩いの場としても活用されている。アメリカの図書館では、デジタルゲームとアナログゲームの両方が備え付けられ、利用者が自由に利用できる環境が整っている。これは、紙の本だけではなく、様々なメディアを有効に活用し、多様なアプトプットを可能とする環境を準備しているという意味において、現代の図書館利用において理想的な例だと感じた。

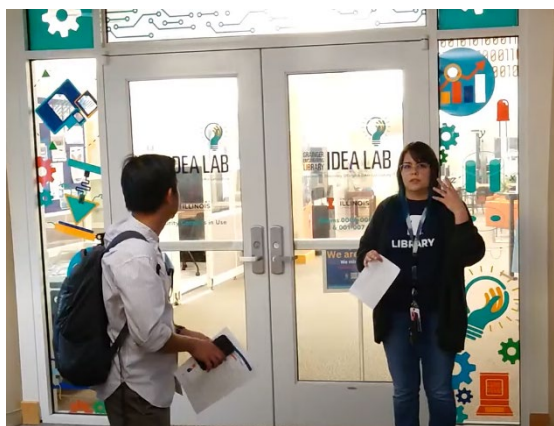


図 13：IDEA LAB 入口

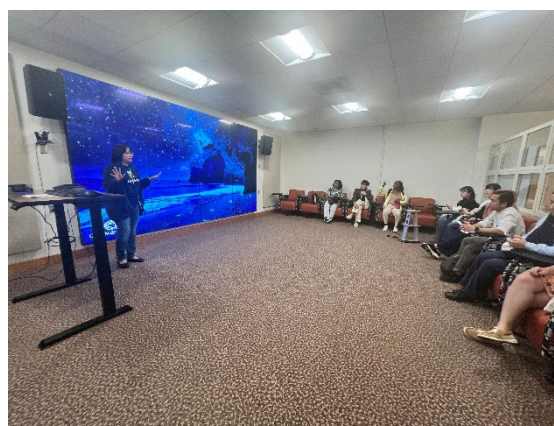


図 14：ビジュアライゼーションシアター
(IDEA LAB 内)

(5) 最終課題と修了式

本プログラムの最後課題は、2週目に提示される。本プログラムの修了要件のようなもので、アクションプランと最終発表から構成されている。アクションプランは、本プログラムで得た知見などを元に帰国後にどのような行動をとることによって自身や自身の所属する組織を変えていくのかといったことを SMART ゴールに基づき作成するものである。SMART ゴールとは、以下の英単語の頭文字をとったものである。

- ・ S (Specific : 具体的に)
- ・ M (Measurable : 測定可能な)
- ・ A (Achievable : 達成可能な)
- ・ R (Related : 関連性のある)
- ・ T (Time-bound : 時間の制約がある)

アクションプランは本プログラムの後半に提出期限が設定される。提出後にプログラムスタッフに確認され、指摘が入り、SMART ゴールに近づくように修正を行うこととなる。

最終発表は本プログラムの最後のイベントとして参加者全員が行うプレゼンテーションで、個

人またはグループで行うことが求められる。本プログラムのテーマとなっている「図書館の自由：オープンで包括的、そして関与的」に関連するシナリオが複数、提示される。その一つを選び、プレゼンテーションの内容を検討・準備し、実施する。制限時間は1名で行う場合は3分、2名の場合は8分、3名の場合は12分、4名の場合は15分という時間の設定がされている。3分間で本プログラムの中で学んだことを織り交ぜながらプレゼンテーションをすることはかなり難しい。事前にプレゼンテーションの構成や内容について練習やアドバイスをもらえるセッションも開かれる。また、プレゼンテーションはイリノイ大学図書館内にアナウンスされ、多くの関係者がプレゼンテーションを見に来られた。

最終発表後は、修了式とパーティーが行われた。さながら日本では卒業式と謝恩会を組み合わせたような感じのイベントである。3週間半に及ぶ海外における過密スケジュールを無事に終わらせることができた解放感と充実感に浸ることができた。同時に濃密な3週間を共に過ごした世界中から集まった参加者たちの別れが迫ってきているという若干の物悲しさも感じながら参加者たちとお互いの健闘を讃え合った。



図 15：修了式



図 16：修了式後の集合撮影

5. ALA 会議

最終発表を行った翌日に、本プログラムに参加したメンバーは各自、次の目的地に移動し、モーテンソンセンターを後にした。帰国する者もいればアメリカ国内の友人を訪ねて帰国する者、ALA 会議に参加するために移動する者と色々である。

私は幸いなことに私立大学図書館協会からの補助を得ながら ALA 会議に向かった。ALA 会議の会場は日本における全国図書館大会のように、全米の都市を毎年巡る形を取っている。2025 年の会場はペンシルベニア州のフィラデルフィアだった。本プログラムが行われたイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の最寄り空港であるシャンペーン空港からフィラデルフィア空港には直行便がないため、シカゴ空港を経由して行くことになっていた。シカゴ空港までは順調に行くことができたが、不運なことにシカゴで悪天候のため、私が搭乗するはずだったフィラデルフィア空港行きの便は遅延に次ぐ遅延の果てに欠航となってしまう、シカゴ空港で一晩過ごすことになってしまった。代替便もシカゴからフィラデルフィアへの直行便は取ることができず、バージニア州のリッチモンド空港を経由してフィラデルフィア空港に到着したのは本来の予定から丸1日後のことだった。

実は、本プログラムに参加している最中に、プログラムスタッフ（Clala さん）より ALA 会議で開催されるカンファレンスの 1 つ（図書館員の国際交流をテーマにしたもので、Clala さんがメインで担当していたもの）のプログラムの中で、世界の地域ごとに分かれて意見交換をする時間があり、そこで、アジア・オセアニア地区代表としてファシリテーターをやってほしいという依頼を受けていた。ALA 会議に参加する予定だった他の本プログラム参加者と共にカンファレンスに参加し、各地域の代表として意見交換を行った。非常に緊張したが、良い経験となった。

ALA 会議は、日本で言えば、毎年横浜で開催されている図書館総合展が非常に規模を大きくして華やかになった感じというのが大雑把なイメージである。初めて ALA 会議させていただいたが、私個人としては、これまでアメリカの図書館に抱いていたイメージが少し変わった。アメリカの図書館は図書資料の電子化を率先して行い、電子図書をメインで活用しているだろうと思っていたが、紙の本についても非常に大切にしており、特に作家と出版社がタッグを組み、展示会のブースにおいて新刊本を作家がサインをして無料で配るというイベントを行っており、人気の作家には長蛇の列ができていた。一緒に展示会を回ってくれたプログラムスタッフ（Clala さん）の話によると、サイン本を目当てに全米から空のスーツケースを持参してくる人たちもいるということだった。



図 17：ALA 会議懇親会場でプログラムの関係者（参加者、スタッフ）と



図 18：ALA 会議内出店エリア

6. おわりに

ALA 会議から日本への帰国の途に関しても不幸なことに悪天候により、予定していたフィラデルフィア空港からロサンゼルス空港への便がキャンセルになり、フィラデルフィア空港に一晩過ごすこととなってしまった。何とか別の便を手配し、日本に無事に帰国（本来の羽田ではなく成田）できた時は予定より 1 日近く遅れていた。これらの経験も海外における日本との文化の相違を目の当たりにできる良い機会と捉えている。このような困難に際しても SNS で本プログラムの参加者やプログラムスタッフ達と連絡を取り合い、励ましをいただき、あるいは助けてもらうことができた。本プログラムを通して得たグローバルな絆や経験は「図書館」や「ライブラリアン」というキーワードを媒介に得られたものであり、とても貴重なものである。帰国後も、SNS やメールなどを通して彼らとは連絡と取っており²⁴⁾、引き続き、世界の図書館（情報学）に関する動向を知ることができることは非常にありがたいことである。

さて、本プログラムの開始時に掲げた以下の目標、

- (1) メイカースペースにおける機器の利活用について利用者に指導する方法を理解する。
- (2) ビデオの撮影と編集のための機器の利活用について利用者に指導する方法を理解する。
- (3) 図書館におけるゲームの保存と利用の現状を理解する。

について、訪問した各所にて確認したところでの現在の私の理解は、以下のとおりである。

- ・各種機器の使用について利用者に指導する明確な方法は存在しない。
- ・ある程度の知識がある図書館員や参加者が協力して機器類を活用している。
- ・危険が伴う機器類については、事前の研修を受けている。
- ・ゲームの利用は、多くの図書館で様々な観点（学習目的・娯楽等）から実施されている。

3D プリンターやレーザーカッター、ミシンといった機器類については、一般に普及してきていることもあり、最初の使い方さえ理解してしまえば、後は各利用者が自由に作業をできるという感覚で捉えているようだった。また、大型の木材加工や金属加工については、場所も限定され、一定の技術を持った人からまずはレクチャーを受けてから対応しているようだった。これらについては、今後も調査を続けながら理解を深め、私の職場への実際の実践に取り入れていければと考えている。また、ゲームの利用については予算や目的により、設置や取り組み方に差異はあるものの、図書館が扱うべき著作物、メディアの1つという位置づけがされているように感じられた。日本は長い期間（一部では現在に至っても）漫画を図書館の蔵書としかどうかの議論があると認識している。世界では既に漫画は日本文化を代表する著作物、メディアの1つとして認知されており、研究もなされている。ビデオゲームも漫画に次ぐ日本から生まれた著作物、メディアの一つとして図書館で継続的に議論しながら積極的に利用していく必要があると痛感した。

約1か月という期間に渡り、世界中から集まったライブラリアンと図書館のことについて真剣に考える濃厚な時間を得られたことはこれからの私のキャリアに多大なる影響を与えることは間違いない。また、ここで得られた経験を今回サポートいただいた私立大学図書館協会ははじめ、私が勤務している立正大学及び日本の図書館に微力ではあるが、可能な限り還元していくことが私の責務であると感じている。

少子化が進み、人手不足が課題となっている日本において、大学図書館における業務環境も厳しくなる一方ではあるが、一人でも多くの方に本プログラムにチャレンジしていただき、多くの経験を得て、その後のキャリアに活かしていただければと願うばかりである。

繰り返しにはなるが、私個人にとって、1か月もの期間を使って研修ができる機会を得ることができたことは本当に有難いことであった。本プログラム参加にあたり、快く研修に送り出してくれた立正大学の関係者に感謝をまずは申し上げるとともに、私立大学図書館協会において採用から対応して下さった皆様にも深く感謝を申し上げたい。

参考文献等

- 1) モーテンソンセンターアソシエイツプログラム
<https://www.library.illinois.edu/mortenson/associates/> (2025-09-14 参照)
- 2) ALA 2025 年次会議・展示会
<https://2025.alaannual.org/> (2025-09-14 参照)
- 3) 私立大学図書館協会国際協力委員会海外研修報告書「海外派遣研修」
<https://www.jaspul.org/ind/committee/kokusai/kaigaikensyu.html> (2025-09-14 参照)
- 4) 私立大学図書館協会国際協力委員会海外研修報告書「海外集合研修 2011 年度」
https://www.jaspul.org/ind/committee/kokusai/shugo_report2011.pdf (2025-09-14 参照)
- 5)4) は、文部科学省「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）」（平成 25 年 8 月）の海外のラーニングコモンズの事例として取り上げられた。
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/08/21/1338889_1.pdf (2025-09-14 参照)
- 6) 上岡真紀子, 「図書館による e スポーツ支援：米国公共図書館の事例」, 帝京大学共通教育センター論集, 16 19-32, 2025-03-17
- 7) モーテンソンセンターアソシエイツプログラム参加者ブログ
<https://associates.web.illinois.edu/> (2025-09-23 参照)
- 8) イリノイ大学応用健康科学部障害者リソースと教育サービス
<https://dres.illinois.edu/> (2025-09-23 参照)
- 9) イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 CU COMMUNITY FAB LAB
<https://cucfablab.web.illinois.edu/> (2025-09-23 参照)
- 10) GREAT Customer Service Guidelines
<https://www.library.illinois.edu/bhrsc/odt/training-for-groups/great-customer-service-guidelines/> (2025-09-28 参照)
- 11) IFLA トレンドレポート 2024
<https://www.ifla.org/wp-content/uploads/ifla-trend-report-2024.pdf> (2025-09-28 参照)
- 12) 2025 EDUCAUE ホライズンレポート
<https://library.educause.edu/resources/2025/5/2025-educause-horizon-report-teaching-and-learning-edition> (2025-09-28 参照)
- 13) Futures Wheel
<https://online.visual-paradigm.com/knowledge/decision-analysis/what-is-futures-wheel/>
(2025-09-28 参照)
- 14) OCLC New Model Library
<https://www.oclc.org/research/areas/library-collaboration-research/new-model-library.html>
(2025-09-29 参照)
- 15) Siebel Center for Design
<https://designcenter.illinois.edu/> (2025-09-30 参照)
- 16) Illinois University Library Conservation

- <https://www.library.illinois.edu/preservation/conservation/> (2025-09-30 参照)
- 17)YOUmedia
<https://www.chipublib.org/programs-and-partnerships/youmedia/> (2025-09-30 参照)
<https://www.chipublib.org/youmedia-teens/> (2025-09-30 参照)
- 18)THE URBANA FREE LIBRARY
<https://urbanafreelibrary.org/> (2025-10-06 参照)
- 19)Champaign Public LIBRARY
<https://champaign.org/> (2025-10-06 参照)
- 20)Abraham Lincoln PRESIDENTIAL LIBRARY AND MUSEUM
<https://presidentlincoln.illinois.gov/> (2025-10-06 参照)
- 21)Arthur Public Library District
<https://www.arthurlibrary.org/> (2025-10-06 参照)
- 22)Strengthening Innovative Library Leaders
<https://www.library.illinois.edu/mortenson-leadership/> (2025-10-06 参照)
- 23) Grainger Engineering Library Information Center and IDEA LAB
<https://www.library.illinois.edu/enx/idea-lab/> (2025-10-06 参照)
- 24) 本プログラム参加者のトリニダード・トバゴ国立図書館の司書より、The Library Association of Trinidad and Tobago (LATT)のニュースレターに投稿依頼を受けて記事を投稿した。
近日中に記事が掲載される予定である。
<https://latt.org.tt/newsletters/>